

資料紹介 『文久三年 葛城彦一日記』について

市村 哲二

はじめに

当館は、幕末の薩摩藩士、葛城彦一に関する資料約一五〇点を所蔵し、また、数点の資料の寄託を受けている。その中には、葛城本人が書いた日記なども含まれており、幕末維新期の形勢を考察できる重要な資料となっている。

本稿では、特に文久三（一八六三）年の九月二日から十一月朔日までの約二ヶ月間にわたって書かれた日記を取り上げて紹介した。そして、島津久光の三度目の上京にあたり、葛城が関わった薩摩藩による九州諸藩と長州藩の形勢視察について、若干の考察を加えることとした。

なお、当日記については、その大部分が既に翻刻がなされているため⁽¹⁾、多くを引用させていただいたが、わずかに欠けていた部分もあったので、筆者の加筆を付け加えながら、文章の後に葛城の動向並びに当時の政治情勢の説明などを付した。また、判読しにくい文字は、□とした。

一 尊王の志士 葛城彦一

葛城は文政元（一八一八）年、加治木島津家の家臣の家に生まれ、旧名を竹内経成といった。国学を学び江戸に出て、当時国学の大家として

有名であった平田篤胤に師事した。幕末の志士たちは、後期水戸学とともに平田国学を学んだ人物が多いが、篤胤本人から薫陶を受けた人は少なかったようであり、葛城は貴重な存在であったことが窺える。帰郷した後も、多くの学者や志士たちと交わり、尊王の志を厚くしていった。

島津家の家督相続の内紛では斉彬を推したが、嘉永二（一八四九）年の嘉永朋党事件（斉彬派の弾圧）に連坐しそうになったために脱藩し、福岡藩主の黒田斉溥（島津重豪の十三男、斉彬の支持者）を頼った。

その後、文久三年に許されて帰藩し、加治木島津家出身で島津久光の養女として近衛忠房に嫁いだ貞姫付の付人として近衛家に仕えることになり、さらに九州諸藩や長州藩の視察などを、藩の家老小松帯刀や側役大久保利通らから命じられた⁽³⁾。

二 日記から見える文久三年葛城の形勢視察

表題の日記は、文久三年八月十八日の政変後、島津久光が朝廷の命令を奉じて三度目の上京をするにあたり、久光上京に先んじて九州諸藩や長州藩の形勢を視察し、報告する任務を帯びた際に書かれたものである。

久光は、政変後の中央政局において、自らが主導する幕府と諸侯を含めた朝廷全体の改革を目指していた。そのためには、事前に諸侯と連携

をとる必要がある、同じ九州の福岡、熊本などの諸藩の要人と接触し、形勢を探る事は重要な任務であったと推察される。その任務に葛城が任じられたのは、おそらくそれまでの経験や人脈などから妥当な人事であったと言えそうである。

以下、日記を日付ごとに掲載していきながら、葛城の動向並びに九州諸藩や長州藩の政治情勢などについて、概観してみたい。

九月二日 晴 文久三年

- 一、四ツ時梶木出立、湯之尾ニ而夜入、此所より五人共夕飯頼候而給ル、則立四ツ時比大口ニ着泊ル、此所より先觸水俣江仕出
- 二、三日、日出ニ立、小河内御番所ニ卒度立寄、丸太氏出合、宮原ハ湯之尾ニ鉄砲張合罷越候由にて留守也、今夜九ツ時比佐敷ニ着、夜食相頼候而給、此所ニ欄寝家御泊也、夜通人馬継立通ル
- 三、四日、昼比八代継所ニ人馬相待居候処、欄寝家御出、税所氏も此所ニ而逢、今晚右近殿小川ニ御泊之所、極内ニ而税所氏御打連、夜白御通行也、今日八代ニ而筑前之牧市内ニ逢、乍途中相咄候
- 一、五日、朝、熊本ニ而筑前之黒田山城へ逢、山形典次郎方江立寄、今日面会前より夜ニ入
- 一、六日、筑後家中百人斗、日田通今日通行、上奉行大□八左衛門朝、府中着、此所より筑前上座郡江越、下座萩本並三奈木加藤方江立寄、夜通罷通り候
- 一、七日、朝、宰府ニ着、此処ニ而相良ニ取合博多江出ル今夕吉永氏江罷越、西町ニ至戸田六郎ニ逢
- 一、八日、朝、戸田同道ニ而大名町之建部孫左衛門方江行、河井隠居

も相見得候、博多二口屋江正親町少将用人徳田隼人相見得候而、今日加藤又左衛門、建部、河井外ニ兩人右江出会相願候由ニ而罷越候由、左候而今夜四ツ時比、河井旅宿江来ル

これによると、葛城は文久三年九月二日に四人の同伴者と共に加治木を出発したことがわかる。その日は大口に泊まり、三日は佐敷において、欄寝家（小松帯刀）が久光に先発して上京の途にある事を知り、四日に八代で面会したようである。また、同日に税所（税所篤）とも面会し、筑前の牧市内とは途上で会って話をした、とある。五日の朝には、熊本で福岡藩家老の黒田山城に会った後、山形典次郎を訪問している。さらに六日の朝には府中に至り、筑後の家中（有馬家家中）百余人が日田街道を通行していく様子を見学した後、筑前の上座郡に入り、萩本、加藤の両人物に会っている。続いて七日の朝に太宰府において相良藤次と合流、その後博多に入り、夕方に吉永、戸田の両人物に会っている。そして八日には建部孫左衛門、河井らの人物と面会している。

葛城が四日に小松と面会した際は、おそらく葛城に与えられた形勢視察の任務に関する再確認等が行われたことが推察される。また、税所が同行した「右近殿」は、島津家一門の島津右近と考えられる。⁽⁵⁾

五日に面会した福岡藩家老の黒田山城は、久光が上京後に面会した何人かの人物評の中で、「実ニ奸佞ノ者ト相見得候」とされている人物である。⁽⁶⁾ なかなか手厳しい人物評であるが、黒田山城は文久三年八月十日には、薩英戦争の戦争祝賀の使節として鹿児島を訪問していること⁽⁷⁾から、薩摩藩の人々の中には既に何人かの知己がいたと推察される。

続いて、九、十の両日の様子を概観する。

一、九日、朝、建部二行、左候而八ツ時過より出立、夜白通行、小屋之瀬二而筑前御家老小河讚岐泊り二相成、明日黒崎二而正親町殿え出會之由也、左候而黒崎江七ツ時比着、正親町殿宿其外付添之者之宿且詰所江番所焼灯明也、御用達方江着いたし福岡之小田部定右衛門二逢諸事承ル

一、十日、四ツ時比小倉村上方江着、渡海舟手当二被差越候

苦舟役人土持平八二逢彼是咄合、此節守衛方談合役二被差越候町

田六郎左衛門殿江も取合咄致

一、先度長州山口表へ筑前より御使者へ被差越候役人建部孫左衛門、

附役二ハ越智小平太、小田部定右衛門、小野加賀也、

一、十日正親町殿取會ニ浦上信濃相勤、同日御馳走有之、晩景より正

親町殿御立、黒崎より御乗船三田尻御越也、九日ニ正親町殿御迎

之先触來候由也、御帰京御迎立ニ被仰付候御大名人數紀州、彦根、

若州小浜、豊前中津、伊予松山候、右五頭より之警固人十人ツ、

上下九十五六人、外ニ正親町殿之雜掌壹人同道也、

一、長州之益田彈正、久坂玄瑞、寺嶋忠三郎、佐々木男也当分在京、

一、米藩池辺茂右衛門、木村三郎、水野丹波在京、石州津和野ハ久留

米候之御兄弟故、水野丹波ハ石州へ相扣、長州世子出京ニおゐて

ハ早速上京可致との事之由

一、正親町殿長州三田尻御滞在中、万事受持之役人佐久間佐平

八月

一、先月十六日下之関ニ而長州之奇兵隊ト同先鋒隊と戦之一条左之通

八月十六日長州世子長門守殿下之関へ御越砲術御覽有之、其夜同

所竹崎之白石方へ御泊之処、其夜奇兵隊より先鋒隊え致砲発切込

候処、即死之者四五人有之、然ルニ先鋒隊之人數ハ長門守固と号白石方へ逃込候ヲ、奇兵隊之者共追継り來候間門ヲ閉候、翌日長門守殿奇兵隊之者共召出御直糺有之候処、先鋒隊之者共ハ大身之者共ニ而、錢遣安く遊女杯陣屋ニ引入旁ミタリケ間敷、殊ニ宮木彦助頭取ニ而不埒之所行御座候ニ付、彦助初不殘打取り申賦ニ御座候、我々共ハ中山殿正親町殿え相付罷下候者共ニ而、皇国之御為ニ一命捨罷在候者共ニ而御座候由申出ル、右ニ付先鋒隊之人數ニハ御糺無之、小郡之様御遣し相成同所ニ而役人え被命御糺明之所、先鋒隊之者共殘念ニ存候ハ、奇兵隊ハ御直糺、我々ハ普代之直參ニ候処、御直糺ニも不及殘念ニ存候旨ニ而、彦助申出候趣ハ、私ハ遊女ニも罷越候、飛入候等常之事ニ御座候、何ぞ格別之場所相通候事も無之、外ニ右様成者無之よしニ而切腹被申付候由、左候而先鋒隊願出趣ニケ条、奇兵隊ト勝負御免不被仰付候ハ、御暇可被下申出候事

九日には、朝に建部（孫左衛門、福岡藩から長州藩に遣わされた役人、との説明がある）に会いに行き、翌日に福岡藩家老の小河讚岐が黒崎において正親町殿（公董）と面会することを知る。葛城も黒崎へ行っているが、福岡の小田部定右衛門と面会したこのみ記載されている。

十日には、小倉にて薩摩藩士の土持平八と守衛方談合役として派遣されていた町田六郎左衛門と面会して話をしている。その後の日記の内容から推察すると、この場において葛城は、八月十八日の政変後の長州藩の状況や、正親町公董の動静などに関する情報などを入手しようとしているものと思われる。

正親町公董は、小倉藩などの九州諸藩に攘夷実行を促すために長州藩が朝廷に派遣を求めた監察使であり、その方面から政変後の長州藩の動静を探ろうとしたことは推察できる。しかし、十日の項に「正親町殿長州三田尻御滞在中、万事受持之役人佐久間作平」とだけあり、十分な接触はできなかったようである。また、三田尻から離れた北九州においては、なかなか詳細な情報も得にくかったと考えられる。

一方で、文久三年八月十六日に下関において勃発した教法寺事件⁽⁸⁾についての詳細が記されているのは、興味深い点である。

また、やや遅れた時期に、葛城が長州藩の事情について書き記した覚書が日記とは別に残っているので、参考にしてみたい。⁽⁹⁾

葛城彦一ノ長州及七卿事情覚書

覚

- 一、正親町殿黒崎駅滞在先江三田尻七卿より使として、本水藩加藤有林当分山田貢ト名乗候者被差越候処、正親町殿御出帆跡ニ付下関江渡り、正親町殿御用人徳田隼人ニ逢、同人より之手紙ヲ以筑前江来り役方ト取会候事、

(親施)

- 一、筑州より長州江被差立候使江山口ニ而益田弾正・高杉晋作等応接之事、
- 一、高杉晋作事本下ノ関奇兵隊惣督、当時小郡辺ニ而他方問合等受持

之事、

- 一、筑州之世子御上京中国路御通行、長州より願、且薩長確執之姿ニ相成候茂、根を糺候へハ如何ニ茂わけなき事ニ付相解候様御執持可被下旨筑前候江頼入之事、

(毛利定広)

- 一、七卿同道ニ而長門守殿上京之儀、御周旋可被下同方より頼入之事
- 一、当分阿州之士気振立候ニ付、徳田隼人差越、且土州迄も差越候而申談、長州奇兵隊并和州之徒ト一ノ調子合旨徳田等心組之事、
- 一、下ノ関江長州御家老国司信濃致出張居、渡海之者改メ嚴重之事、
- 一、同所教法寺出張之先鋒隊人数凡三百人余之事、

(勝行)

- 一、筑前御上京前長州より之御使者井上与四郎来り候事、
- ##### (資風)
- 一、白石正一郎并山本林蔵外ニ四五人九月初旬より蜜々上京いたし候との事、

- 一、小倉大里之御本亭并阿弥陀寺之三浦屋源蔵か事、
- 一、下関白石方江御預ケ早船之事、

以上、

(竹内経成)

十月

葛城彦一

これによると、長州藩が福岡藩とやりとりしている状況を報告する中で、「薩長確執之姿ニ相成候」との記載があり、政変後の薩長両藩の対立状況に触れながら、「根を糺候へハ如何ニ茂わけなき事ニ付相解候様

御執持可被下旨筑前候江頼入之事」と、福岡藩に薩長両藩の斡旋を依頼していることがわかる。また、それに続く文にも、福岡藩に七卿を同道した毛利定広の上京の周旋を依頼している記載があり、政変後の長州藩の苦しい立場が読み取れる。

引き続き、十二日以降の日記を掲載する。

一、十二日、小倉立、小屋之瀬泊

一、十三日、青柳より新宮へ着、七ツ時此相嶋へ渡海一夕泊、十四日

相嶋より新宮へ渡り、奈多船より夜二入候而博多中嶋江着

一、十五日、河井、建部二行、夕建部等来ル

一、十六日、立、大早追二而十七日夕□ツ時比、熊本山形方二着、泊
ル

一、十八日、川尻二到り、御着待上候而言上

十二日に小倉を立つた葛城は、木(小)屋之瀬に泊まった後、十三日は相嶋に渡り一夕泊し、十四日の夜に博多に至り、十五日に河井、建部の兩人に会っている。十六日に博多を立ち、十七日の夕方に熊本に着き、再び山形典次郎宅を訪問し泊、翌日の十八日に川尻にて久光の到着を待った後に報告した、とある。

久光は、九月十二日に鶴丸城を出発していた。総勢千七百余りの藩兵を引き連れての上京であり、鹿児島を出て、阿久根、出水、佐敷、八代と進んだのは、前年三月の上京の時と同じ行程である。⁽¹⁰⁾ 十八日に川尻に着いて葛城の報告を受けた後は、前回の上京行程とは異なり長州藩の領域を避けた経路を進んでいる。川尻から阿蘇を横断して二十六日に豊後

の佐賀関から乗船し、海路にて二十九日に兵庫に到着後、大坂を避けて伏見街道を通り、十月十三日の朝に京都の二本松藩邸に入っている。⁽¹¹⁾

葛城は大津まで久光に同行しているが、十九日に再び命を受け、一行から離れて熊本に向かっている。その後の葛城の足どりについて、日記の続きから辿ってみたい。

一、十九日、大津御泊迄罷越候処、又々御用被仰付金子御渡相成候間、

夜通熊本江通行也、山形氏二泊ル

一、廿日、七ツ時比同所出立、廿一日暮比博多着、廿二日夕吉永へ行き、帰り掛萩本吉十郎江問合候

一、廿三日、夕萩本来ル、小田部来ル

一、廿四日、朝五ツ時播磨殿濱屋敷二而同人御逢二相成候、志賀同道
大□方へ至り泊

一、廿五日、夕小田部来ル

一、廿六日、出立蛙町泊、廿七日、小倉着

一、廿八日、朝下関苦船江掛合出ス

一、廿九日、筑前世子今日大里御渡海二而、長州吉田御泊

昨夕阿久根、白濱兩人豊後路より来、土持氏関より渡海

一、十月朔日、土持、白濱等打合いたし候事

一、同四日、小倉乗船、五日田之浦滞船、六日四ツ時過田之浦出帆、

八日七ツ時過室之打越に繋船、夜七ツ時より同所出帆、九日四ツ時分大坂着御届申上候、同日今橋二丁目小嶋屋善作方江行、宿ハ
土佐堀松屋

一、十日、暮より八間屋舟に而登

一、十一日、朝伏見え着直二上京、東桐院錦御屋しき外長屋村山方¹²⁾へ立寄、二本松御屋しき二行、大久保家江至り、御用筋申上ル、暮比近衛殿御裏御殿藤井方¹³⁾へ止宿

葛城は、大津を立つた後、再び北行して二十一日に博多に至り、五日後の二十六日に出立して翌日再び小倉に着いている。その後、十月四日に小倉を立ち、九日に大坂着、十一日の朝に京都に入り、二本松の藩邸に至り、大久保利通に報告をしたようである。その日の暮れ頃に近衛邸に至り、藤井良節の家で止宿している。この旅程内においても、様々な人物と接触していることが日記の記載からわかる。

十七日には再び命を受け、藤井と共に大坂に向かう。

一、十七日、御用被仰付藤井同道に而下る、同日夜四ツ時過大坂着、虎屋へ泊

一、十八日、藤井同道買物二出ル、今日相良上坂京都へ登、夜四ツ過より舟乗、兵庫へ未明着、直二上陸□屋へ廻ル、十九日見物滞在、廿日暮前蒸気船江乗込

一、廿一日、未明出帆、廿二日夜四ツ時過豊後佐賀関着船、藤井同道此所江上陸、小船備受鶴崎江廿三日朝五ツ時過着、肥後屋二而朝飯給、昼より立、藤井氏ハ熊本之様罷通、拙者今夕府内江泊

一、廿四日、森本泊、廿五日、森泊

一、廿六日、日田泊、御陣屋江暮前より罷越、吉田憐助取合、元メ也、屋代増之助御代官也、いろく尋事有

一、廿七日、御代官方も立掛至り、今夕平松泊、牧市内日田行掛二逢、廿八日、三奈木加藤方江泊、廿九日、甘木役元泊、晦日、雑掌泊、

十一月朔日より博多泊

十八日、大坂を出て兵庫に至り、二日後には乗船して二十二日に佐賀関に上陸、二十三日鶴崎にて藤井と別れ、府内に泊まる。豊後の道を行き、二十六日に日田に至り、二十七日に平松泊、牧市内に出会い、二十八日には三奈木に至って十一月朔日には再び博多に滞在している。

この時、葛城がどのような命を受けて行動していたのか、日記の記載からは十分に読み取れない。日田の代官所を訪問していることから、やはり何らかの形勢視察の命を受けていたとは考えられるが、日記も博多に至った時点で終わっているため、あくまでも推測の域を出ない。

おわりに

以上、葛城彦一の日記の記載から、葛城の形勢視察及び文久三年久光の三度目の上京について側面から見てきたが、久光の上京経路は出発前に既に決定していた事項であったかもしれないが、葛城の状況報告もある程度参考にはなったとも考えられそうである。

また、細川、黒田の両家は、政変前から藩主もしくは世子が久光と前後して上京する事が既に決していた¹⁴⁾。今回の上京において、諸侯との強い連携を図りたい久光にとっては、葛城がもたらしたであろう熊本、福岡藩に関する情報が自らの政策を進めていく上での判断材料の一つになったとも推察される。ある程度予想された些細な情報であったかもしれないが、満を持して今度の上京に臨もうとしていた久光にとっては、たとえわずかであっても安心できる材料にはなったであろう。

そして、長州藩に関する情報に関しても、葛城は情報入手が困難な状況の中で可能な限りの聞き取りに努めている様子が窺え、その事も薩摩藩上層部の信頼を得ていくことに繋がっていったと考えられる。

その後葛城は、近衛忠房に嫁ぐ貞姫に付き従うこととなるが、元治元年（一八六四）年七月の禁門の変の後、西郷隆盛の密命を帯びて、相良藤次と共に再び長州の探索に潜行している。⁽¹⁶⁾

文久三年の日記についての考察は以上であるが、葛城は、元治元年（一八六四）年と慶応三（一八六七）年にも日記を書き残しており、これらの日記も合わせて読んでいくことで、当時の政治情勢を更に違った側面から見えていけると思われる。

葛城の日記は、幕末期の形勢を深く考察していく上で、今後もぜひ広く活用していただきたい資料である。

注

- (1) 山内修一『薩藩維新秘史 葛城彦一傳』（葛城彦一伝編輯所一九三五年）に、日記を翻刻した釈文が掲載されている。
- (2) 桐野作人『さつま人国誌 幕末・明治編2 平田国学の勤王派葛城彦一（上）』（南日本新聞 二〇一三年）二五二～二五三頁
- (3) 『加治木郷土誌』（加治木町 一九六六年）一四四～一四五頁
- (4) 葛城と同じ加治木の出身で、長年の同志であった相良藤次を指している。
- (5) 前掲『薩藩維新秘史 葛城彦一傳』四〇三頁
- (6) 芳即正『島津久光と明治維新』（新人物往来社 二〇〇二年）

(7) 『鹿児島県史料 忠義公史料二』（鹿児島県 一九七五年）No. 五一六 七六五頁

(8) 教法寺事件とは、文久三（一八六三）年に長州藩の正規部隊である撰鋒隊と奇兵隊の間で勃発した武力衝突事件のことを指す。奇兵隊士宮城（木）彦助の切腹、高杉晋作の奇兵隊総督罷免で決着した。〔町田明広『攘夷の幕末史』（講談社現代新書 二〇一〇年）一六四頁の記述を参考とした。〕

(9) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』（鹿児島県 一九九三年）No. 七五五 五六四頁より引用

(10) 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（吉川弘文館 二〇〇四年）二二七頁

(11) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』『久光公上京日録』 七二六頁

(12) (3) の相良藤次同様、葛城の長年の同志であり、京都留守居副役であった村山齊助を指している。

(13) 葛城の長年の同志であった藤井良節を指している。

(14) 前掲『幕末政治と薩摩藩』二一五頁

(15) 葛城は、文久三年十二月二十四日夜に起きた長崎丸事件（薩摩藩が幕府の長崎製鉄所から借用した長崎丸に対し、長州藩が下関海峡において砲撃した事件）についても後日、詳細を報告している。〔『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』No. 八三四 六七三頁〕

(16) 前掲『薩藩維新秘史 葛城彦一傳』四三九頁

○ なお、本稿の執筆にあたっては、町田剛士「禁門の変前後の薩摩藩
による京都警衛について―申木野郷士野元良図『上京日記から』―」
〔黎明館調査研究報告第二十六集〕所収）も参考にした。

（いちむらてつじ 本館学芸専門員）